核兵器廃絶宣言都市です

慰霊と平和の祈りを ささげましょう

た時刻に黙とうをささげましょう。

原爆が投下された時刻

広島市 8月6日 8:15

時まで、 は午後1時 火曜日は休み)

●長崎原爆被災写真パネル

市民会館ギャ

前9時 8月1日月~ · ラ リ 向 17 -後 4 月 水

5、4

、17日/以は午後15時(1日

彦根市は

原爆投下の日に

広島市と長崎市での原爆死没者のめい 福と、世界の恒久平和を願い、それぞれ の家庭や職場、地域で、原爆が投下され

長崎市 8月9日 11:02

) ビデオ上映 日(日のみ) 映(8月7日印

た原爆の絵 (旧、同14 (複製)

展示内容

は休館

前10時~午後6時

(月曜日

8月2日火~

同17日休

平 和

の願い

を込めた折鶴の作成にご協力くださ

また、

展示場では、

色紙を用意して

いますので、

ポスタ

立

- 集会室

多数ご来場ください

「ヒロシマ・

ナガサキ原爆展」

を開催 んで

します。

ビロシマ・・

ナガサキ原爆写真

りの心に平和の尊さを

と繰り返され

ないよう願

また、

市民

ただくたと

宗内容

(土・日曜日は除く)

被爆現物資料

し願っい

かり刻が

協力

広島平和記念資料館・側長崎平和推進協会

問い合わせ先

団総務課☎30

6

-00番、

X 22 1

398番

なりません

このような核兵器による過ちが二度

永久に語り継がなければ

みや原爆の恐ろしさは、

が国は、

世界で唯一の被爆国です。

被爆者の苦し

階ロビ

午前8時30分~午後5時15

白 に

「核兵器廃絶都

を宣言しました。われを求め、昭和58年10

世界の!

核兵器

の廃絶

と世界平和を願

つ

E

旦

3

ガ

荒神山の頂上からひこにゃん 田んぼアートを見よう

参加しませんか 党神山まるごと体験ツァ

持ち物 帽子、軍手、タオル、飲み物など ※安全に活動ができる服装でご参加ください。

こにゃん」を見学し、昼食後は荒神山自然の家のク 内容 ラフト棟で、焼き杉キーラックを作ります。 ①ウォーキングのみの参加 日時 9月18日(日) ※小雨決行

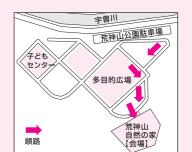
受付・集合 9:00~、開始10:00~ 集合場所 荒神山自然の家 クラフト棟

荒神山自然の家のウォークラリーコースを歩き、

荒神山の頂上から、石寺町の田んぼに描かれた「ひ

※車でお越しの人 は、荒神山公園駐 車場をご利用く ださい。

定員 100 人 (先着順) 対象 小学生以上 ※小学生の場合、保 護者同伴



参加費 100 円 終了予定 12:00 ②ウォーキング+昼食(弁当)

参加費 700円 終了予定 12:30 ③ウォーキング+昼食(弁当)+クラフト

参加費 1,000円 終了予定 14:30 ※参加費には保険代、資料代などを含みます。 申込方法 氏名、参加人数と参加コース、連絡先な どを電話、またはファクスで荒神山自然の家へ。

申込・問い合わせ先 荒神山自然の家☎ 28-1871、 FAX28-1872、Eメール: kojinyama@ma.city. hikone.shiga.jp

タウントピックス



自由につ 日本大震災について感じ いてなどを自分たちの たこと、

験をするコー 覚チェックや、箸で豆をつ 彦根でイベントが行わ の意識や関心などを高めること を目的に、6月18日にビバ 、関係団体が連携して、食育6月が食育月間であること たくさんの人がさまざまな体をするコーナーなどが設けら 関係団体が連携 試食コ トでは、 を学んで 骨密度: のほ れま ンシテ 食育



見を.

たりすることを目的とし

身を見つめ直.

したり、

新たな発

いる思い

を聞くことで自分自

・年生が、 れば、

他の生徒が抱い

年生の生徒自らが企画・

、各校から選抜され自らが企画・運営を

中学生広場は、

各校の2、

3

ます。

た生徒による作文発表や

などを行

ŧ

部活動のこと、

東

して開催し、

食育フェアが行われました

中学生広場が行われました

7月8日

ひこね市文化プラ

中学

は、市内の7つの子生広場が開催され

つの中学



Brasil 1



第23回 日本の中のブラジル

今まで学校のことを書いてきましたが、それは、ブ ラジルだけではなく、いろんな国の教育制度は日本と

は異なる点もあれば、似ている点もあるということ と、その国の制度に、最初はなじめないかもしれない が、少しずつ周りの人に教えられ、慣れていくものだ ということを伝えたかったからです。

また、遠く離れていても祖国の言葉を伝え続けたい 気持ちはどこの国の人であっても同じだと思います。 明治41年(1908)、多くの日本人移民が笠戸丸でブラ ジルのサントス港に到着しました。出発前に聞かされ ていた夢の土地とは違い、見たこともない毒を持つ動 物や植物への注意、言葉や文化が違う人々とともに、 見知らぬ大地のコーヒー農園での仕事。それでもがん ばってこられたのは、いつかは祖国へ帰るという夢を 持っていたからです。だからこそ、子どもたちには自 分たちの母語である日本語を伝え続けてきたのです。

このことは、今の日本に住んでいる約23万人のブラ ジル人の多くも同じです。

お店やレストランなどで耳を澄ませば、ボサノヴ ァやサンバの曲が流れていたり、スーパーでは中南 米なじみのタピオカがあったり、街中でポルトガル 語が聞こえたりします。それらは、日本で暮らしな がらも、ブラジルを想いブラジルのことを伝えよう とする人がいる証でもあるかのようです。

日本で暮らしていても、「子どもたちに母語を伝え たいしという思いが、ポルトガル語を使って保育をす る保育所「ペケノポレガル (小さな小指)」などとなっ て現れてきています。保育所としてだけではなく、今 年の4月からプロジェクト・ジラソウ(ひまわりプロジ ェクト) が実施され、共同で学習活動が行われていま す。毎週、土曜日午前10時から正午までの間、日本 の小・中学校に通っている約20人の子どもたちが、 ブラジルの国語教科書を使って、「今まで話せたけれ ど、書けなかった」ポルトガル語を習っています。

自分と同じ言葉を話し、同じ悩みを感じている人 と「話が出来る」のは心のケアにもなり、それが、 ブラジルの中で成功した多くの日系人のように、が んばれる源にもなることを祈っています。

【彦根市国際交流員 平田エジナ】

広報ひこね 平成23年8月1・15日 広報ひこね 平成23年8月1・15日